

2018年5月20日(日)／説教者：國分美生

説教：「『教会』のはじまり」

聖書：使徒言行録2:1～13

「教会の誕生日」と表現されるペンテコステは、「聖霊降臨日」とも呼ばれます。使徒言行録の記述によれば、イエスが十字架にかけられたのちに復活し、天に昇って行かれ、その後、イエスの弟子たち、イエスに従っていた者たちが集まって祈っていた日に、聖霊が下った、その日の事です。この日、この場にいたイエスの弟子たちは、ユダヤ教の収穫祭である「五旬節」を祝うために集っていたようです。それは過ぎ越しの祭りの翌日から50日目のこと。つまりイエスが十字架にかけられてから2ヶ月経たない時期でした。

そこで起きたこととして描かれているのは、まず、ものすごい風が吹きすさぶような轟音。そして、人々の頭の上にそれぞれ火のような舌がとどまり、いろいろな国の言葉でしゃべりだす様子。筆者は聖霊の力が人々に及んだ様子をここで強調しています。この日を境にキリスト者にとっては、ペンテコステはユダヤ教の祭りではなく、キリスト教の大切な記念日と捉えられるようになりました。

激しい物音を聞いて、驚いて見にやってきたユダヤ人たちというのは、世界中に離散した後、エルサレムへと戻ってきていた人々。バビロン捕囚による強制移住を大きな要因として、神から与えられた嗣業の土地から遠く離れて暮らさざるを得なかった人々でした。彼らはイエスの弟子たちが聖霊に満たされて語りだした、様々な国の言葉を聞いて驚き、困惑します。その「他の国々の言葉」とは、ユダヤ人がパレスチナから散らされ、根付いて生活していた各国の言葉だったからです。エルサレムにいるユダヤ人だけでなく、世界中に散らされた神の民であるユダヤ人たちに、イエス・キリストの福音が届けられようとしている様子をここから見ることができます。自分の慣れ親しんだ言語、胸にストン、と落ちる言葉で福音が届けられるということは私たちにとってなんと大きな恵みでしょう。

沖縄の教会も、しまくとぅばによる主の祈りや讃美歌を用い、福音を味わい、宣べ伝えてきた歴史があります。主のみ言葉は、思想、言語、民族、国境…あらゆる垣根を越えて豊かに広がります。イエスの弟子たちがそうであったように、その神の業に私たちも用いられていきます。聖霊の息吹に満たされ、日々、新しい人・新しい教会として、私たちは歩みだしていけますように。(國分美生)